石櫻新聞

発行所
盛岡市長田町
岩手高等学校
岩手中学校
出版委員会
責任者　藤原信一
印刷所
川口印刷工業株式会社

メガネは
水晶堂
中の橋通一丁目
中央通一丁目

新執行委員に聞く

この会は出版委員会が主催したもので、先頃新しく選ばれた後期執行委員の抱負を伺うため開いたものです。執行委員である会長、副会長、各常任委員長、応援団長の出席を求めましたが二人の副会長のうち一人と生活と図書と応援団の方からは出席しませんでした。

出席者
会　長　長谷川良久
副会長　小山田栄二
学習委員長　杉田　修
文化委員長　小林　勝雄
体育委員長　佐々木昭則
出版委員長　藤原　信一
質問者　上島　利夫

左から藤原君、佐々木君、小山田君、長谷川君、小林君、上島君

司会は出版委員長が務めました。

司会者―きょうみなさんに集まっていただいたのは、今後の生徒会運営についてみなさんに見解や抱負を語ってもらおうと思ったからです。ではどうぞ。

学習委員長―いままではこの学習委員会は名だけのものでしたが今度からは、生徒各々の学習意欲の向上と学校全体の受験ムードを盛り上げるため、休み時間を利用してみんなに一題でも多くの問題を解いてもらおうと英、数、国について一日一科目ずつ問題を出していきたいと思っています。みなさんん協力してくれることを望みます。

質問者―なるほどそういえば文化委員会の活動は聞いたことはありませんね。

体育委員長―今年から授業にも柔道の時間が設けられたので校内体育大会にも取り入れ盛大にやっていくつもりです。

出版委員長―ここ二、三年は生徒会活動の不振と出版委員会の低調がめだってきましたが、この打開策として我々は生徒会の方と協力し、沈滞した学校の空気を活気あるものにするため、ペンと内容ある紙面でもって生徒に働きかけるつもりです。その一つとしていままでのように年二回しか発行しないようなことではなしに、機会あるごとに発行するつもりです。しかしこれは予算と関係してくることなので近いうちに学校側と交渉してみるつもりです。いずれにせよ、生徒諸君の協力があってこそ活発な出版委員会の活動が約束されるのですから何分協力してくれることを望みます。それから石桜新聞や会誌『石桜』にもたくさん投稿してくれるように望みます。

司会者―ここで出席してくださった常任委員長に語ってもらうことを一応やめていただいて、今度は出版からの質問に対し会長・副会長に答えてもらいます。

質問者―ずばりお聞きします。そもそも会長に立候補した目的は何でしたか。

会長―学校側に対して、問題や長髪問題について不満がありました。だが個人的にそれらを学校側に要望しても話にならないので、生徒会の問題として学校側にもっていきたかったのです。そのため会長に立候補しました。それと規約を改正したかったのです。

質問者―だったら個人的な不満を生徒会の問題にしようとしているように聞こえますが。

会長―でも大部分の生徒は長髪賛成ですからねやはり生徒全体の問題ですよ。

質問者―生徒会の規約について言ってましたが、どういうことを改正したかったのですか。

会長―今は生徒会活動にしろクラブ活動にしろ前期は高三が主となってますが、これでは高三の受験勉強にひびくと思います。そこでもう前期から高二が主体となってやっていってはどうかと思い規約改正を考えました。

副会長―それについては私も同感です。生徒会の不振の原因もそのへんにあるんじゃないですか。

司会者―今のをまとめると、受験勉強のためどうしても高三は生徒会の方がお留守になる後期になり仕事がよくわからない高二があとを引き継いで、仕事を覚えるのに後期いっぱいを費やしてしまい高三になる頃にはまたもと受験勉強に忙がしい。つりまこの状態で生徒会の発展を望むことは無理かもしれないということですね。このほかにも不振の原因として、生徒自身がバラバラであることがあげられますね。

質問者―そのバラバラだということの対策としてどんなことを考えてますか。

会長―うむ……ですから生徒諸君に文化部でも運動部でもいいからはいってもらうということでどうですか。

副会長―同感ですね。部にはいれば生徒がもっと緊密になるし、部活動も活発になると思いますね。

質問者―はたして生徒がはいってくれるでしょうか。

会長―さあ。でもはいってもらいたいです。

質問者―ではそれができたとして、その後の生徒会をどう運営していきますか。

会長―それはですね。生徒総会を数多く開き、生徒の意見を聞きたいと思います。

司会者―つまり生徒総会を数多く開くことによって生徒と役員が深く結びついていって、そしてそれによって生徒会を盛り上げるということですね。

質問者―会長として生徒に望みたいことは何ですか。

会長―何事にもやる気を出してほしいということです。

質問者―学校新築の問題はその後どうなってるんですか。

会長―さあ「都市計画のため待ってほしい」ということしか聞いてませんが。

副会長―何でも都市計画で雨天体育場を少しけずられるということですが。

質問者―そのくらいならあまり関係ないので早いとこ建ててもらいたいですね。

副会長―近いうちに校長のところに行って、その事情について聞いてきましょうか。長谷川君。

質問者―さて、新築問題も出たところで学校側へ要望したいことは？

会長―何よりもまず新校舎を造ってもらいたいですね。そうすれば今起こっている、土足問題だってなくなるし、生徒の学習意欲も増すでしょうし、実験的な学習も効果が上がると思います。

質問者―じゃあ最後に学校内での生徒会の権限は？

会長―非常に弱いですね。学校側では生徒会の要望を少し聞きいれてもらいたいですね。

副会長―学校側では事なかれ主義が強いようですね。これでは学校の発展が望めないと思います。

司会者―さて、会も進みましたが、学校側に事なかれ主義を改めてもらいたいということで会を終わりたいと思います。

きょうは、みなさんどうもありがとうございました。

会長の見解を生徒諸君に知ってもらうためにも、こういう会をちょくちょく開き、この欄をかりたいと思います。

石桜会功労章授与さる

表情変えず受けた館沢君

前期石桜会功労章は体操部のキャプテンで東北大会で一位の好成績を示した館沢君に授与された。

彼は市民体育大会で一位、高体連で二位、インターハイでは規定で二十四位で規定自由合わせて四十六位、県体で二位東北体操選手権大会では一位という輝やかしい成績を示した。

これは岩高体操部始まって以来二度目でしかも二十四年ぶりの活躍だった。

当の館沢君に受賞の感想を聞くと、「別に何もないよ。」と照れ臭そうに笑いながら、小さな目をますます小さくして語った。そこには彼特有のポーカーフェイスはみられませんでした。

県で一位、東北で四位の〝三つのリンゴ〟

県と東北で好成績を収めた演劇部

演劇部制作の「三つのリンゴ」が先頃岩手放送の主催で行なわれた岩手県高校生ラジオ作品コンクールでみごと一位を取った。また東北北海道コンクールでは四位になったほか演技賞まで授けられた。

この「三つのリンゴ」は高三の高橋克彦君が原作したもので大学受験をテーマにしている。しかし作者は「あくまでも受験を離れたメルヘン（童話）」として考えてもらいたい」と言っています。内容は昨年の文化祭に上演した一幕劇「ながれ」に手を加えたものです。あらすじは順と洋一という二人の親友の間に大学受験が溝を作り、そこに悪魔がつけこむが、しかし二人の友情が回復し悪魔をおいはらうという結びになっています。

この「三つのリンゴ」が岩手放送で録音したときは部員がたいへんな苦労をしたそうです。たった四分のセリフのリハーサルを約二十時間位行なったり、本番のとき何度もやり直しをくったりして、気がついてみたら午後三時から次の日の朝五時までスタジオで録音を取っていたということです。それでも、しあげたテープを耳にしたとき、それまでの苦労もどっかにふっ飛んで感激でいっぱいだったそうです。特に高橋君・小松君・吉田君・佐藤君らの高三の連中にはこの上ない思い出となったことでしょう。

真写念記で前放送岩手

大分国体を戸嶋先生に聞く

十月二十三日より二十八日まで行なわれた大分国体の模様を戸嶋先生にお伺いした。

「大分国体は知ってのとおり大分と別府を中心にして行なわれた。まずあちらに行って気付いたことは、道路が非常によくてまるで碁盤の目のように区画されていた。これは戦争で町が焼かれたことと、観光地だということが原因しているのだろう。それから会場の設備であるがこれは質素なものであったが国体の後にいかにそれを利用するかによく神経がゆきとどいていたりして、気がついてみたら午後三時から次の日の朝五時までスタジオで録音を取っていたということです。それでも、しあげたテープを耳にしたとき、それまでの苦労もどっかにふっ飛んで感激でいっぱいだったそうです。特に高橋君・

開会式を見たいという人が多くいるので閉会式の予行演習を二回もやって見せた。だから地元の人々の歓迎ぶりもたいしたものであった。旅館の人達やデパートの店員の応対の仕方もよい感じを与え非常に親切であった。これは、大分や別府が観光地なため普段からのことがそのまま行動に出たのかもしれない。またバスなども役員、選手を無料で乗せるものもだいぶ走っていた。さらに気がつくことは県民性を紹介するという態度ができていて剛健、友愛、信義を県民はモットーとしていた。この点は見習うべきだと思う。

国体での岩手県の成績は天皇杯が二九位で振わなかった。しかし決して試合内容は悪くはなかった。個々において立派なものがあり、いいところまでいっているんだが惜しいところで敗れ点数にならない場合が多かった。でも東北六県で大分に選手を送った数で一番多かったのは岩手県であった。これは何を意味するかというと、東北大会で多くの者がいい成績をあげていることを示す。これは喜ばしいことであるし大切なことだ。

それから国体での不振の原因としては他県のレベルが向上してきたことである。だからうちの県でももっと強化しなければならないと思う。まず練習量が大切である。一つのことをやりぬくには何か別な面に犠牲が生じるのは当然であるし、しかたないと思う。話は変わるが今度の国体で気の毒なのは、札幌から来た生徒で体操の練習中に鉄棒から落ちて死んだことである。本当に痛ましい事故だった。

四十五年に岩手で国体を開くのだが、知っての通り国体を開く県でプラスとなるのは、産業、通信網、道路などが充実してくる中央のつながりも強化してくることと、県勢の発展が約束されるところにある。

岩手でも大分くらいの会場を設けて国体を行なうことは可能だと思う。しかし道路の整備、輸送能の面関はもっと強化することは必要欠くべからざるものであろう。また大分のように観光地として徹底していて旅館などが多ければ問題はないのだが、やはり岩手では宿泊が大きな問題となろう。だから民泊が多くなると思う。

それから受け入れる岩手県民が今のままでは大分に劣ることは間違いない。どうも岩手県民は国体をやるといっても人ごとのように思っていて関心がうすい。早い機会に一つ、県民運動として盛り上げていかなければならないだろう。それにしてもインターハイのように不評をかわないよう気をつけてほしい。とにかく好感を持たれる態度と環境で迎い入れなければならない。」

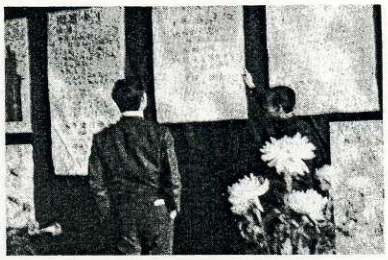
カメラが捕えた 文化祭

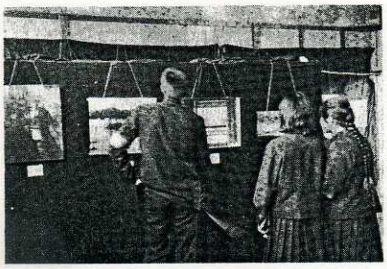
我が校最大の年中行事で、文化部この一年間の成果を総結集し披露する文化祭が十一月二日三日の両日にわたり、秋晴れのもとで盛大にくりひろげられた。両日にわたって、文化祭と色あざやかに描かれた。校門を入る来客は続々として絶えなかった。

その文化祭を我々がカメラで補えたもので、再現してみたいと思います。

クラブと会場を紹介しましょう

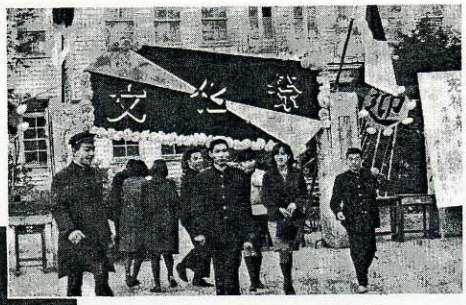
第一会場―優雅な書道展。第二会場―優勝杯や楯がずらり並らべられた書道展。第三会場―海外と手広く文通しているPFC。第四会場―すばらしい絵が飾られている絵画展。第五会場―吊り橋とテントでおなじみの山岳部。第六会場―書物の年代を詳しく調べた図書部。第七会場―非行少年問題を取りあげた生活委員会。第八会場―嘘発見器で人気を呼んだ物理部。第九会場―岩石や月の研究と鐘乳石で話題を呼んだ地学部。第十会場―試験管やビーカーをならべ異様な臭いを放っている化学部。第十一会場―好評だった三つのリンゴを聞かせる演劇部。第十二会場―話題いっぱいの映画部。第十三会場―傑作ぞろいの写真部。第十四会場―県内で手広くやっているJRC。第十五会場―社会問題を取りあげその突込んだ研究で好評を博した社研部。第十六会場―ネズミの眼球を研究し注目をあびた生物部。

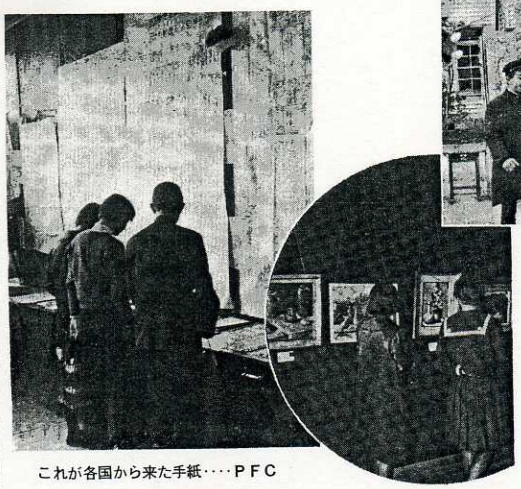

先生非行少年とはですね……生活委員会


ええとこれは……写真展

試合の喜びを語る体育委員

たのんだのまだかしら……食堂


出入り絶えない文化祭校門


この絵実物みたいだワ……絵画部

これが各国から来た手紙……PFC

バイクを明確に図解した……物理部

静けさの中に優雅を持つ……書道部

文化祭見たまま聞いたまま

小畑勝行

十一月二日朝、平常通り登校したが、生徒諸君の顔が異常である。あちこちにタムロして談笑している姿は見なれた光景であるが、中には挙動不審（？）も目につく。そもそも役目とはいえ、早朝から校門の所に佇ずんでいる受付係の表情が、身を切るような寒さにもかかわらず極めておだやかなのはどうした訳だ。が、やがて女子高校生の列が続くようになると、いかに鈍な私でも察しがつく。先の表情は未知なるものへの期待と、緊張とそして若干の興奮の入りまじったものと解すべきか。二日間の文化祭が老朽校舎にあって、あたかも株式市場のように活気を呈した理由の一つがこれである。しかしながらそれは二次的なものであり、もっと根本的なものがあり、やはり生徒自身の創造的活動にあると思う。事実、私の見聞した範囲によれば、一人として仕事をサボっている者もいなければ、授業の際のようにボンヤリしている者もいない。退屈しているのは職員室における教師連中である。

言うまでもなく文化祭の主体は生徒なのだから、それはよいとしてよいが、私のいいたいのは、ふだんの学習生活からは伺い知れない生徒のファイトと独創性である。それはまさに「教師はクラブ活動で生徒と共に生活している中で、教室では見ない生徒の性格、能力を見ることができる。特にその人間的なよさを。教科にない特技、事務能力、仲間の中で黙々と働く能力、仲間をリードする力、更に自主性、悩みに対する誠実な苦闘、仲間へのやさしさにふれる。」（竹田友三「高校教師論」）ことであろう。クラブ活動の時こそは、生徒が生き生きと動いている時であり、授業の時とは見違えるようなきびきびとした挙動がそこにある。私は何も皮肉をいっているのではない。そもそも日本人はもっとユーモアを解さねばならぬ。だが無駄なおしゃべりはやめて、この辺で私製々文化祭メモメをのぞきながら、具体的な会場スケッチに入り、私の責を果たしたい。

まず最初に郵便友の会。男子高校にもこういうものがあったとは意外であった。いやこれは私の認識不足を責めるべきかも知れない。現代において文通や切手収集は何も女性の特許ではないから、もっとも最近は恋文にもテープを使用すると聞くが、昔の△△のまずい筆蹟が懐しく一抹の淋しさを感じた。感心したのは、文通だけでなく、施設訪問や方言調査など巾広い活動をしていることである。大いに続けたまえ。

次に絵画部。ここは書道部と共に力作の研究発表が観客の目を引き、しばし芸術の秋を満喫する。美術に対してシロウトの私は、それでも係員の解説がつくと、解ったような顔で「観賞」する。係員はまた、日頃の恨みここぞとばかり、美的センスとタッチの妙を以てカサになって攻めかかる。そんな時、聞き手は人の好い笑みを浮かべながら相槌を打たねばならぬ。しかし抽象画の場合には、なかなか私のアゴも重かったのにT君は気づいたろうか。彼の頬が紅潮していたのは、あながち絵の説明に熱が入りすぎたせいでもなさそうである。私はそのとき背後に女生徒の忍び笑いを聞いた。ようやく解放されて次は山岳部。私をカモと見たかK君が近ずいてきて、八幡平―裏岩手連峰縦走の自慢話をひとくさり、あげくの果てには貧弱な私の身体をジロジロ眺め回しながら「先生今度一緒に岩手山に登りませんか。」ときたもんだ。しかし私は嬉しかった。

人間連帯の安っぽいヒューマニズムと小さな幸福感に酔っていた私は生活部でもつかまった。「現代における青少年の非行化の現状が」テーマだったらしく、壁にいくつも苦心の統計表、グラフが続く。きけば警察署まで足を運んで資料調査にあたったとか、本当に御苦労さん。「調査なしして発言なし」とは毛沢東の言葉だったか知らん。

次にこわごわ物理部の会場をのぞいて、入口にある嘘発見器が眼につくと、元来臆病な私も将来に備えて（？）実験してみることにした。見事、私の嘘がバレて、機械の前に脱帽せざるを得なかった。人工頭脳も進歩している昨今、私達は現代科学の認識を広めると共に、人工の頭脳に負けないよう平素から生の頭脳を錬磨しておかなければならぬ。それから化学者、地質学者の卵の説明を聞き流しながら、写真展示の前でハタと足が止まる。いそいそと近寄ると1君、O君。様格好をとりながら「教えてやる」という表情なので、初めは無関心を装い独自の美的観賞にふけいっていたが、彼等の教師然としたポーズに誘惑を禁じ得ず、何よりその熱っぽい瞳に負けて遠近法、構図のとり方を教わる。ここでも私は門外漢の悲哀を味わなければならなかった。非力感が私の胸をしめつける。（生徒からこう威圧を感じてならないし、まして自己満足に終わってはならない。たえずその長所、欠陥を明らかにして向上の道を歩むべきではないのか。そうしてこそ初めて有意義な活動も可能なのであり、又何度か私達は灰色の青春ということばを使いました。その苦しみはこれからだって続くと思います。しかし人間全体が少しでも高い美しい生活のできる様に、自分がつとめているのだということは、常に信じてゆきたいと思います。」（竹田「高校生」）という言葉もそこから生まれると思うが如何？

その三、各クラブでは文化祭をやりっ放しにしてはいないか。できれば反省会を持って自分達の仕事を総括すべきである。ものごとは全て繰り返しであってはならない、まして自己満足に終わってはならない。たえずその長所、欠陥を明らかにして向上の道を歩むべきではないのか。そうしてこそ初めて有意義な活動も可能なのであり、又何度か私達は灰色の青春ということばを使いました。その苦しみはこれからだって続くと思います。しかし人間全体が少しでも高い美しい生活のできる様に、自分がつとめているのだということは、常に信じてゆきたいと思います。」（竹田「高校生」）という言葉もそこから生まれると思うが如何？

その一、係員の説明が時として押し売りめいたものになっていないか。客によって、或いは観る物によっては、静かに観賞したい場合もあるものだ。「節度ある」ことはこれに限らず何の場合でも大切である。

その二、音楽部のレコードコンサート会場など一部に高校生らしからぬ態度が見受けられた。青春を謳歌するのはいいとしても、真の自由は規律ある生活の中に存在することを知らねばならない。

その三、各クラブでは文化祭をやりっ放しにしてはいないか。できれば反省会を持って自分達の仕事を総括すべきである。ものごとは全て繰り返しであってはならない、まして自己満足に終わってはならない。たえずその長所、欠陥を明らかにして向上の道を歩むべきではないのか。そうしてこそ初めて有意義な活動も可能なのであり、又何度か私達は灰色の青春ということばを使いました。その苦しみはこれからだって続くと思います。しかし人間全体が少しでも高い美しい生活のできる様に、自分がつとめているのだということは、常に信じてゆきたいと思います。」（竹田「高校生」）という言葉もそこから生まれると思うが

生徒の問題意識を汲みとって、心の準備をすることができる。

現代における社会問題として、最近マスコミを賑わした汚職事件をどう考えるか、又交通事故による生命の危機を科学の進歩との関係で把握することは重要だと思われる。これからもこうした社会問題に目をそむけず、現実を直視していく態度を心の片隅に堅持したいものである。その他まだ印象に残ったクラブもあるが、紙数の都合で割愛していただく。

さて、以上から文化祭における生徒の主体的な取りくみが偲ばれる筈だが、多少手ばなしでほめすぎたきらいもあるので、最後に思いついたまま苦言を呈しておく。

新人戦を飾る

柔道堂々の優勝

去る十一月五日六日の両日にわたり、柔道の新人戦が盛岡一高で華やかにくり広げられた。

団体戦では我が校の実力を遺憾なく発揮し堂々優勝した。側にいた見物人や他校の学生は我が校の実力の程を目の当たりにして、ほとほと舌を巻いたようであった。しかし「天は二物を与えない」という諺どおり個人戦では、軽量級が準々決勝で惜しくも敗れ重量級が三試合目でこれまた惜敗した。しかし岩高の面目にかけても中量級では、準々決勝、準決勝と勝ち進んだが決勝で、天運に見放されたかこれまた不幸にも、健闘むなしくついに土がついた。

結果は次の通り。

団体戦（五日）

一回戦
岩手　二―一　福岡高
二回戦
岩手　四―〇大船渡工
三回戦
岩手　五―〇　大迫高
準々決勝
岩手　三―〇　平館高
準決勝
岩手　四―〇　盛岡一
決勝
岩手　四―〇　花　北

決勝の組み合わせと結果

△三上　引分け△田中
○向井田　合せ技×佐々木
○藤根　寝　技×照井
○工藤　優勢勝ち×佐藤
○早坂　大外刈り×吉田

個人戦の組み合わせと結果

軽量級
準々決勝
×三上　優勢負け○釜北
重量級
三試合目
×向井田　優勢負け○専北
中量級
一試合目
○小山田　小内刈り×水商
二試合目
○小山田　縦四方×竜沢高
三試合目
○小山田優勢勝ち×久慈高
準々決勝
○小山田　優勢×大船渡工
準決勝
○小山田　優勢×市立
決勝
一ノ関修紅
○阿部　上四方×小山田

全精力をこの時とばかりに

またまた優勝

卓球部

十一月十二、十三日の両日水沢市民体育文化会館で行なわれ団体戦では我が岩手高が二度目の優勝を成し遂げた。

戦績は次の通り。

団体戦
一回戦、二回戦、三回戦、四回戦と軽く勝ち進んだ。
準決勝　岩手3―1大船渡
決　勝　岩手3―0花巻北
ダブルスには佐々木・新里組、松村・村上組が出場した。
準決勝
佐々木・新里2―0菅原・八重樫（盛三）
松村・村上2―0今野・岩潤（一関二）
決勝
佐々木・新里2―1松村・村上

個人戦
佐々木、新里、村上、松村の四選手が参加、各選手それぞれよく健闘しその結果佐々木が決勝で盛岡一高の有坂に接戦の末、惜しくも敗れたが第2位にランクされた。又松村は第8位新里は第12位にランクされた。

コラム

外には、粉雪が舞い、固く氷が張りつめる時節になった。高三の人達は、受験勉強や、就職準備であわただしいことだろう、よい結果が出ることを祈るのみである。冬休みを迎えるにあたって、人それぞれに計画もあろうだが是非とも長編小説を読破することを計画の中に入れてもらいたい。若い頃、読んだ本はその人の一生を左右するとさえいえる。読書の有意義なことは言わずと知れたことであろう。長編小説を読むことは一つの頂きを征服することにも似ている。読み終えた満足感、充足感をこたつにでもあたりながら、十分に味わってもらいたいものだ。じっくりと本を読む楽しさもわかるだろう。またウインタースポーツで、若い体を鍛えるのもよい思い出になろう。要は迎える冬休みを漫然とすごさず、実のあるものにしてもらいたいものだ。

クラブ紹介

社研部

社研部と聞けば、なにかいかめしい政治思想をもっている過激な団体のように思われがちだが、実際は明るいクラブ活動をモットーにして、先日は、岩手女子高の社研と懇談会を開き親交を深めた。とかく運動部に押されがちな文化部においてもっとも活発な活動をしているクラブであろう。

社研部の歴史を振り返って見ると、最初は、社研クラブとして発足し、予算ゼロの時代が続いたが、二、三年前に正式の部として認められ今日に至っている。

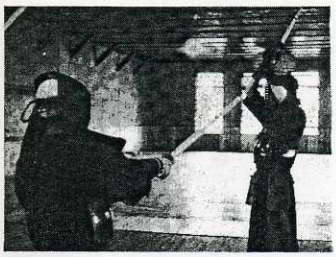
先輩の話では、最初、学校側ではなかなか認めてくれなかったそうだが、もっと社研部というものに、理解をもって戴きたい。それだけ他校に比べて、我が校の社研部の歴史は浅く伝統がないので、今後は、岩手高の社研部ではなくてはだせない特色みたいなものを部活動に反映して行きたい。社研部では、三年計画で非行少年問題を調べたが、一応去年で打ち切った。最初は意気込みだけが良いが、結局は、例年警察の調査書とアンケート中心のものに終わり、他校と比較して表面上は立派なものに見えるが、実は内容の乏しいものだった。今年は社会問題に体当たりし、警察の調査書などを参考にせず、自分で調べた。部員の意見がまとまらず、夜が明けてしまうことさえあった。その結果、文化祭においては、他校が俳地調査や出稼ぎ問題などの言いふるされ、マンネリ化したものに終わったのに対して、我が校のものは固い内容だったのであまり一般受けはしなかったようであるが、知識人の間では大好評であった。市内の社研部において異色の存在だといえよう。だがご多分にもれず、社研部も部員不足に悩んでいて、活発な活動が出来なくなる恐れが多分にある。市内の社研部の親交会を作ろうとする機運もあり社研部は今大きく伸びようとしている現在、是非是非新人多数の入部を望む。

岩手高の知識人の面々

剣道部

我が部の主義は「正しい剣道を身に付ける」ということにある。御承知の通り段とは試合の勝ち負けではなくて正しい姿勢と剣道の型を身に付けているかどうかによって与えられるものです。現在の我が部の有段者は、二段が四名で初段が六名となっている。県内でも高二で二段をとっている者は七名しかいない。その中に四名が岩高でしめていることは誇りとしてもよいと思う。

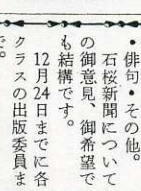
我が部の特長として一カ月に一回部会を開いて皆の意見を聞いてそれを参考にして部の運営をはかっていることや、二カ月に一回講義の時間を設け試合に対しての心構えや剣道の意義を話しあっていることや、我が部なりの部則を作りそれによって部を統一していることが掲げられる。今最大の悩みは一週間に三日しか雨天体育場を使用できないことである。しかたなく残りの三日は新田町にある橋市道場を借りて練習しているが、せいぜい一時間位しかできない。試合間近になると武徳殿におもむき練習をする、だが帰りはきまって時計の針が九時近くをさしているとあって、部員には強制的に来てくれるようと勧めるわけにいかない。しかし皆が進んで来てくれるのでたいへんありがたい。その部員の意欲のためか試合にはいつも好成績を挙げている。ここ四、五年は高体連や県体や新人戦でベスト八位内に必ず顔を見せている。学校の設備不十分のため、思うように練習ができないがそこは部員の団結の力でカバーし今後も努力していくつもりである。



校外雑観

我々が一仕事終えて学校に帰ってきたとき、ふと目に入ったのが写真の光景であった。そして手に持ったカメラのシャッターを思わず押してしまった。なぜならば、我々にはあまりにも感心な行為に見えたのである。もうこんな生徒は居るまいと思っていた矢先だったので尚それが印章的だったのかもしれない。しかしながらよく考えて見ると、このような行為をすることは公衆道徳からいえばごくあたりまえのことなのである。それなのに我が校には今やゴミすらも拾う者が見えないような状態である。生徒諸君よ、生徒会不活発が叫ばれているが、上ばかり求めずにまず根本的な校内外の美化から始めようではないか。きょうからでもいいゴミを見つけしだい拾うように心掛けようではないか。

（紙くずを拾う生徒）



原稿を募集！

次回の石桜新聞又は会誌「石桜」に投稿をお願いします。

内容は、作文・詩・俳句・その他。

石桜新聞についての御意見、御希望でも結構です。

12月24日までに各クラスの出版委員まで。

学用品の御用命は当店へ

筆記に大切な　セーラー　パイロット　万年筆を‥‥

坊っちゃん文具店

盛岡市本町1丁目中央　TEL　②4532
盛岡市中の橋通り支店　TEL　③4091

‥青春映画の黄金番組!!14日公開!!

おゆきさん　●和泉雅子主演●　底抜けの面白さ！ズバリ和泉の適役!!

日活青春スター勢揃いの娯楽映画決定版!!　吉永　浜田　・青い山脈

青春アゴーゴー　ジュディオング　浜田光夫　和田浩治　若さでダッシュ！エレキでスパーク!!

正月上映番組

舟木一夫　和泉雅子　北国の旅情　渡哲也　吉永小百合　青春の海　園マリのヒットメロデー　西郷輝彦のヒットメロデー

傷だらけの天使　夢は夜ひらく

裕次郎の　逃亡列車

完全暖房　盛岡日活

信用あるスキー用品

スポーツ用品・体育施設・ゴルフ用品

日本スポーツチェーン　専門の店

藤澤体育堂

売店　サンビル　デパート　②1445
本店　盛岡市材木町　③1435(代)
支店　花巻市吹張町　2639

家庭訪問

スポーツは何でも　鈴木先生

岩手高校の門を出て自転車のペダルを踏むこと約二十五分。ここは盛岡市郊外の青山町。見晴らしのいい景色が視野いっぱいに広がる。閑静な住宅やアパートが立ち並ぶ一角に鈴木先生のお住居がある。そのお宅へ我々はお邪魔してみた。きちんと整えられた明るい茶の間でさっそく我々は質問には入った。それに対して先生は静かな口調で答えられた。

「高校時代のクラブでは何を?」

「私は卓球部には入っていました。」

「クラブの成績は?」

「高二の高体連のとき個人で優勝し三年のときは二位で、二年のインターハイでは個人二位で三年のときは五位でした。」

「高校時代の勉強と受験方法はどのようになさいましたか?」

「このようにクラブ活動に専念していたため家に帰ると疲れが出てあまり勉強できなかったものです。そのため授業時間を極めて大切にしました。で、いつも黒板とにらめっこでした。また大学の受験勉強にとりついたのも、クラブの大会などが済んだ三年の九月からでした。それからまず、二カ月間というものは全科目の「完成八週間」を毎日一項目ずつやりました。だから日によって割と早く終わった日もあれば、朝までかかったときも多々ありました。とにかく眠くても何でも一日も欠かさずやったものです。おかげで大きな自信がつきました。そして十一月と十二月には全科目の教科書を三回もやったものです。今から考えて見ると教科書をやったことが一番よかったように思います。

高校の教科書を丁寧に三回ぐらいやると岩手大の入試には八割はとれると岩手大の教授の集まりなどでは言っています。それから一月以後の残された日々は一科目につき一冊の参考書を、他の参考書には目をくれずやったものです。」

家族そろっておこたで

「高校時代で好きだったもの?」

「科目では数学よりむしろ国語や体育が好きで暇を見つけては推理小説など、文学に親しむよう心掛けたものでした。今も岩高の図書館にある推理小説は全部読んでしまいました。君たちも暇を見つけて文学に親しむよう心掛けた方がいいよ。」

このとき今まで庭で遊んでいた坊やが縁先から上ってきて何やらお母さんに甘えていた。そして今度はお父さんである先生のところへきて何やらやっていた。なごやかな家庭的なムードがあった。それから坊やは、我々闖入者をめずらしそうな、人見知りするような、でもかわいい目で見ていた。それから奥さんが我々におもてなししてくださった。

「高校時代の思い出話を」

「体育のとき空中転回をやらされたときそれができなかったのです。私は非常に負けず嫌いなため毎朝体操場に行って空中転回の練習をやりました。あるときは背中をぶちしばらく気絶してしまい見回りの小使いさんに介抱されたこともありました。とにかくその練習を一週間ぐらい続けたらできるようになったのです。その時はたいへんうれしかった!これに限らず長距離であろうが短距離であろうが人並以上にすべてをやれたし体育には自信がありました。学年でも体育に関しては何でも上位の方だったと記憶しています。」

「先生を志した理由は?」

「私は元来教えるのが好きでした。そして高校時代から教師があこがれでした。」

隣の部屋で奥さんが坊やの下着でも取りかえていたのであろうか、突然坊やが色白な二本の足をバタバタさしてはしゃぎながら隣の部屋から逃げてきて先生のうしろに回って甘えた。先生も笑っておられた。どこの家でも子供は人気ものである。

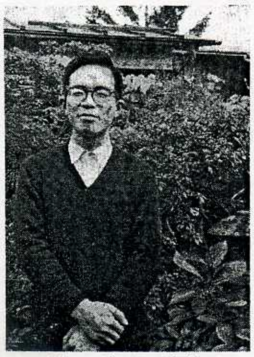
「岩高生についてのご感想を」

「ずばり言って無気力である。勉強にしろ生徒会活動にしろクラブ活動にしろ一つ一つのものに真剣になってぶつかっていくという根性を持った生徒が昔に比べてずいぶん少なくなった。実に嘆かわしいことです。受験勉強一つを取ってみても、それを死にものぐるいでやらなければならない時期にきているのにそうしない。そうしないどころか、受験勉強のあり方に対する世間での批判に動揺され扇動されている。今の岩高生をたとえるなら世間に扇動されてやがてそれに疲れ虚脱した状態である。まだ挙げるなら岩高生は自分の行動に大きな変化がある。例えば、一人でいたり教師と一対一で話すときは極めて素直であるが、何人か集まると素直でなくなることがある。これはつまり生徒自身がふらふらしているからである。これは生徒が強い信念と自分の学校に誇りを持っていないことを意味する。それは一つには学校の設備が影響していることは否定できないと思う。しかし、そんなところにばかり責任を負わせないで、今の環境の中で自分なりの強い信念を持ち自分の持てる力を十二分に出しきることが必要である。岩高生にはそれが大きく欠けている。設備の悪い中で全力を出したという自信が最後の勝利につながると確信します。」

ここで我々の質問も一応終わり、貴重な先生の体験をお聞きして感激するとともに大いに反省させられた。話も一段落したので御家族そろったところをカメラにおさめておいとまをした。

岩高にきてびっくり!!　遠藤先生

大きな体を持ち眼鏡の奥に人のよさそうな目を持っている。物理の遠藤先生の下宿を、我々はお訪ねした。下宿先は岩手高校から歩いて五分とかからないところで、上田である。先生の部屋には入ると、一人住まいをしておられるせいか、学生の部屋という感じを受けた。四畳半に机と本棚があり、そのほかテレビやストーブがまず目についた。本棚にはさすがに、物理に関した本がたくさんはいっていた。まだ一部しか手をつけていないような世界文学全集が、赤いきれいなケースにおさまり、二十冊ばかり並んでいた。テレビの上におかれた、ラトンジスタラジオから流れる歌を耳にしながら、さっそく質問には入った。



庭をバックににこやかに

「高校時代は?」

「高校のときは、生物部には入っていました。体育部にはいって毎日疲れた体で帰って、受験勉強とそれとを、両立させる自信がなかった。そのため、体育部には入らず、文化部でしかも好きな生物部を選んだ。生物部では、プランクトンの採集と研究などをやり、たいへん活発であった。秋田や塩釜などで開かれた、動植物研究発表会にも参加し大好評を博したこともありました。大学には入ってからは、家から下宿料しか送らない約束になっていたので、あとの足りないところは、家庭教師のアルバイトをやった。そのためクラブには入っている余裕がありませんでした。」

「受験勉強としてはどのような方法を?」

「英語は「英文解釈」と「豆単」。また大学ラジオ受験講座を聞き、そのテキストを切って一冊の問題集を作ってやってみました。

数学は「数Iの研究」「数IIの研究」「数IIIの研究」をやりました。

国語は「古文の研究」「現代文の研究」に目を通しました。

理科は物理と化学を受験でとるつもりだったので、「物理の傾向と対策」「化学の傾向と対策」をやりました。

社会は教科書と「社会の傾向と対策」をやりました。また自分の受ける大学の過去六年間のコピーを研究し傾向をつかむこともやりました。」

「学生時代のエピソードは」

「大学入試に一度失敗しました。それからというものは、人一倍の勉強をしなくてはいけないと改めて自覚し、毎日、十二時間机に向かった。それは自分でいうのも変だが、本当に血のにじみ出るような努力でした。肉体的にも精神的にもつらかった。精神には浪人という心の負担がさらに重荷となって加わった。十二時間やることを三カ月ぐらい続けたが神経がたいへん疲労し、ついにノイローゼになってしまいました。しかたなく三カ月ぐらい休んだ。その後また、勉強をやり出したが、前の三カ月間毎日十二時間もやったということが、相当な自信と実力をつけてくれました。そして十月からは予備校に通った。このときはもう楽でした。今となってはひじょうに楽しい思い出となっています。」

「趣味は?」

「何でもやるが、これといったものはありません。高校時代は家の商売が花に関したものをやっていたので、園芸などにも興味を持ち、花などを丹念に育てました。」

「先生を志した理由は?」

「私が高校時代に父も兄も教師をやっていました。その関係もあってか、私も内心教師になりたいと思っていました。が、いざ他人から勧められると、兄弟そろって教師になるのもという気もしました。そして四、五年たって大学を卒業するころになると、他の会社に就職が内定していたがやはり教師が自分の性にあっているように思われました。」

「岩高生についてのご感想を」

「この学校にきて本当にびっくりしました。他の学校に比べて、あまりにものんびりとしている。そのいい例が、受験に関することです。三年にもなってまだ志望校も決めずにぐずぐずしている生徒がいる。だから、三年の後半になって自分の実力にあったところを選ぶようになるのです。これは逆でなくてはいけない。一年のときに少し高いと思うような志望校を決めそこに是が非でも、はいろうと努力するのが当然です。少し無理なところと思っても三年間本当の努力をすると、大抵のところには、は入れます。そういう努力をしてもらいたい。気がつくことですが授業時間を見ていても、内容のある質問が少ないということである。少し先生を質問ぜめにするくらいのファイトをもってもらいたい。そして男子校の良さを生かしてもらいたいと思う。男女共学だと女生徒に何かと気を使い、自分の身だしなみにも気を使う。ところが男子校だけだと、そんな必要はいらない。その分を勉強に向けてほしい。また、他校の生徒に対して岩高生の勉強についてのライバル意識を大いにかきたててもらいたい。とにかく、受験勉強を批判ばかりせず、まず努力してみることが、先決だと思います。」

こうして庭に出て、記念にやさしい先生にレンズを向けた。

編集後記

最初のうちは、私が出版委員長の責を十分果すことができるだろうかと思い非常に不安でした。だが反面いままでのマンネリズム的な新聞から一歩脱けだした斬新的な新聞を、一つ作ってやろうとする闘志もわいてきたのも確しかです。だが、他の委員との連絡の不十分な点や、私自身の経験不足とより、もう一ついままでの殻をうちやぶことが残念に思まわれますが、新しい試みを、積極的に取り入れて全力を出し切った満足感でいっぱいです。

校長に聞く

校舎新築のほうはどうなっているんですか。――

「校舎を新しく建てるとなると、生徒数や運動場の広さなどからして一万二千坪ほど必要なんだ。一万二千坪の中にはテニスコート側の方ももちろんはいるんだ。しかし今、そこは都市計画にはいっているのでテニスコートの方の土地は将来使用されなくなる。そうなると学校で必要としている土地を取られることになるんだ。だからどうかテニスコート側を都市計画からはずしてくれるよう県や市に申請しているところなんだが、まだその答がきていない。だからそれが明確になるまで、どうしようもない状態なんだ。」

次に岩中の生徒数が年々減ってきているようですが今後岩中をどうするおつもりですか。――

「志願者がなくなったらやめる。これは先代の理事長もそのおつもりでこの学校を造ったのだから。」

岩中から岩高に上がっていく者には入学試験制度がないのでのんびりしてしまうということがあるんじゃないですか。――

「一概にのんびりすることは悪いとはいえないね。それに岩中から岩高にスムーズに上がれることにこだわらず、六年間の学校生活とみるとよいと思うんだよ。」

それでは、岩中の三年生のときに高校一年の勉強をさせるとかそういう進んだ教育をしてはどうですか。――

「それはやっているつもりだよ。」

高校と中学の校舎がいっしょになっているせいか、高校にたよって、岩中の生徒には自立心がつかないように思えるんですが、高校と離してはどうですか。――

「自立心がないように見えるかね。私はあまり感じないけれど。とにかく、学校を離すということは運営の経費のためや校舎を他に建てるという問題が生まれるので、無理だね。」

十分間のホームルームの時間だけじゃ先生と生徒が親密になるということは困難じゃないかと思うんですが、その点はいかがですか。――

「だから、月曜日の朝にも一時間設けているだろう。それでも足りないとは思うんだがね。だから先生の所に積極的に家庭訪問をすることだよ。そして、そこから何かを学び取ることだよ。私の学生時代も、しょっちゅう先生を訪問して、お話を聞いたりして学んだものだよ。」

今の生徒と昔とを比べてどうですか。――

「昔はスパルタ教育でやっていた。だから勉強がどんなにつらくてもやったんだよ。又、環境がどんなであろうとそれに負けず勉強をし、それによって自分をみがいていったもんだ。今の生徒はなんでも悪いことは環境のせいにしてしまい努力することに欠けているね。勉強を例にとれば、勉強というものは極めてつらいものなのに、それを生半可な気持ちでやっているから途中でいやになり、しまいには投げ出してしまうんだ。そのつらいところを我慢してやるところに意義があるんだ。そして、すべてをやり終えてから初めて楽しいものになるんだよ。すべては勉強によって学びとれるんだよ。」

この無気力な状態を打開していくためには、何か良いお考えはありませんか。――

「やはり、こういうことは、いくら学校側でやれやれと言っても直らない問題なので生徒が自主的にやってくれるのを待つよりしようがないね。しかし、生徒自身が『自分は何のために学校にきているのか』ということを考えれば、おのずから活発になり、勉学にも励むと思うんだがね。その自覚を早くしてほしいね。」